

吉備国際大学研究紀要  
(人文・社会科学系)  
第25号, 19-26, 2015

## バーデン地方に関わる作家たちの戦中・戦後文学 —地方作家たちとアルフレート・デーブリンの場合—

清水 光二

### Authors during and after the War in the Baden Region of Germany In the Cases of Local Authors and Alfred Döblin

Koji SHIMIZU

#### Abstract

The book "Exil, Widerstand, Innere Emigration. Badische Autoren zwischen 1933 und 1945" contains local authors in the Baden region of Germany. They tried to write down their personal experiences during and after the war just for the record. On the other, Alfred Döblin, who lived and worked also in Baden-Baden for several years after the war, created an imaginary family in the novel "Hamlet oder Die lange Nacht nimmt ein Ende" and made each of the family members tell a fictional story in terms of responsibility of war. Döblin provides intentionality a multi-layered narration in this book. And as a result, that causes destabilizations of sense of self of the characters. They must try to search for the new self in these destabilizations.

**Key words** : Baden Region of Germany, Literature during and after the War, Local Authors, Alfred Döblin

**キーワード** : ドイツ・バーデン地方、戦中・戦後文学、地方作家、アルフレート・デーブリン

#### 1. はじめに

ドイツ文学の中で「亡命文学」は大きな一分野をなしているが、特定の地方に焦点を当てた「亡命文学」が議論されることは珍しい。通常文学史に登場する亡

命作家と言えば著名な人物がほとんどであるが、地方の亡命作家の場合はそのほとんどが無名に近いと言えよう。今回取り上げる『亡命、反抗、内的亡命 1933年～1945年までのバーデン地方の作家たち』<sup>1)</sup>も、その多くが無名でやがては忘れられようとしている作

家たちである。だが、戦中・戦後ドイツの一地方の文化の変容・変質を考えようとする場合、対象となる作家が有名かどうかは関係なく、むしろその社会的資料としての価値が優先されるべきである。

その居並ぶ無名の作家たちの傍らを、戦後の一時期アルフレート・デーブリーンという大きな存在が偶然通り過ぎた。フランスとの国境に近く、戦後はフランス軍の占領下にもあったバーデン地方で、地域の作家たちが体験した亡命を巡る戦中・戦後の体験と、戦前すでに『ベルリン・アレクサンダー広場』で著名となっていたデーブリーン個人の亡命と帰国を比較することで、一地方おける「亡命文学」研究もその層の厚さと多様性を増すことであろう。

## 2. 『亡命、反抗、内的亡命 1933 年～1945 年までのバーデン地方の作家たち』を通して見るバーデン地方の戦中・戦後文学

このアンソロジーで紹介されている作家たちはすべて、1933 年から 1945 年の間、これまで経験したことのないような状況に直面していた。ナチによって強制された亡命であれ、いわゆる「内的亡命」であれ、あるいは自ら決断した反抗であれ、彼らの人生は変わってしまった。出版物によって公に語ろうとする書き手の状況が、まったく別物になってしまったのだ。彼らの多くにとって、現状は彼らの人生における実存的な中間休止を意味していた。しかしながらこれらの作家の誰もが、言葉や書物を用いて、自伝あるいは架空の話として、詩や手紙、エッセイの中で、あの時代の自己と社会の有り様を映し出す方法を見つけ出していた。体験との格闘がどれほど多様であったかは、ここに収められた文書によって明らかにされるであろう。<sup>2)</sup>

こうした序文で始まる『亡命、反抗、内的亡命 1933

年～1945 年までのバーデン地方の作家たち』(1993) は、ドイツ南西部のバーデン地方に暮らしていた(あるいは一時滞在していた)有名・無名の文筆家たちが、ナチが政権を取ってから終戦を迎えるまでの間に(1933 年—1945 年)、どのような体験をしたかをそれぞれ個人的に書き記したものを取りまとめたものである。その表現の仕方は様々であるが、それぞれが真摯に「あの時代の自己と社会の有り様を映し出す」ことに努力しているという点では、いずれも一致している。

ここで、そのアンソロジーに収められた執筆者のすべてを紹介することは困難であるが、後に述べるアルフレート・デーブリーンとの比較の関係もあり、戦時中アメリカに亡命し、戦後になってドイツに戻って来た 2 名の作家を紹介する。

(1) 一人目は、1902 年にカールスルーエで生まれ、1936 年にアメリカ合衆国に移住し、戦争が終わってからはドイツに帰国し、1971 年にバーデン・バーデンで亡くなった作家、オットー・シュラークである。彼に関して特徴的なのは、戦争中アメリカ側の人間として戦いに参加したということだ。

アンソロジー『亡命、反抗、内的亡命』に収められているのは、1951 年に出版された小説『回答』の中の 1 章「到着」で、亡命者である主人公パウル・ベルナーが 1949 年アメリカから、爆弾によって破壊された彼の故郷カールスルーエに戻ってくるところから始まる。ただしパウルは、アメリカ在住中に自ら進んで空軍に志願し、故郷のカールスルーエ空襲にも参加していたという、著者自身の体験に重なる設定がなされている。そのため、パウルの故郷への帰還は、特別複雑な感情を伴うものにならざるをえない。

列車がようやくカールスルーエ駅に到着しようとするとき、反対側の席の男から彼は唐突に声を掛けられる。男は、パウルが網棚の荷物を下ろした際に、荷物に付けられた外国航路の船便の札(「キュナード・ライン——ヨーロッパ行き」)を目にしたのだった。

「それでは、ゆっくり休んでください」と、あの男が呟くのが聞こえた。

「どうもありがとう」と、パウルはちょっと無理して微笑みながら言った。

「あなた、きつとここが気に入りますよ」

「ええ、きつとね」

「今だって私たちのドイツは美しい……廃墟となった今だって美しい……」<sup>3)</sup>

男は、パウルをアメリカ人だと思っていたのだった。自分の置かれた微妙な立場を意識しながらパウルは、男の誤解を肯定することも否定することも出来ずにいる。ガラスに写る彼の姿は、とても疲れていた。

パウルは、駅で貧しい身なりの中年女性に会う。彼女は病気の妹が待つ自宅に帰ろうとしていたのだが、接続の列車に乗り遅れてしまう。「今は泊まるためのお金もないの」と言う彼女に対して、パウルがお金の提供を申し出ると、思いがけない反応が彼女から帰ってくる。

人から全てを取り上げるのは、よくないことだわ。頭の上の屋根や家具など、何もかも。その上、子供たちまでも……今度はポケットに手を入れ、お金を出そうなんて……ひどいことだわ。それで、事態が改善するわけでもないし。要らぬ世話で、失礼で、本当に理解できないことだわ。<sup>4)</sup>

前出の男と同様に、船便の札からパウルがアメリカ人だと考えていたこの女性は、アメリカ人の彼からの施しは素直には受け取れないのである。

カールスルーエは、本当に美しい街だった。街は扇状に作られており、宮殿の近くに全ての道路が集まっていた。それが今は、「ポンペイの廃墟のように、あるいはハイデルベルク城の廃墟がそうであるように、まるであたかも廃墟が自明のものであるかのように、ここにあるのだった。」<sup>5)</sup>

駅舎の前でパウルは、学生時代の知り合いの女性に偶然出会う。すさんだ生活の上、お金を必要としているらしく、彼は彼女から自分の所に泊るようにと懇願される。これもまた、彼が金持ちのアメリカ人だからだ。

今パウルは、この町の駅前広場に立っていた。彼女はまだそこにいた。彼はそのことは分かっていたが、彼女が今どういう状況にあるのかは、分からなかった。この前に彼女に会ったときは、事情が全く異なっている。全く違っていて、それを思い出したくもないほど、心の中で目を閉ざしていたいほどだった。だがそれにもかかわらず、彼女は見たくもない夢の中に現れたのだ。そうになると、もうその姿を閉め出すことが出来ない。彼は身震いし、トランクに引っ張られて少し傾いた姿勢で、ヴェラの後を歩いていった。半分壊れたタクシー、ヴェラが捕まえた獲物を見ようとして互いにお互いぶつかり合う運転手たち、黄色い車体の路面電車、昔は宮殿のように思われたが、今はくすんだみすばらしいホテル、などの側を通っていった。寒気がし、絶えずあくびが出た。ちょうど春が始まろうとしていたが、本当にひどい夜だった。1949年3月20日から21日にかけてのその夜は。<sup>6)</sup>

街の荒廃だけでなく、そこに住む人々の心の荒廃こそが痛々しい。自ら進んでアメリカ空軍に志願し、故郷カールスルーエの爆撃にも参加していたパウルは、その町の廃墟の姿に対して深く罪の意識を感じざるをえない。

このようにオットー・シュラクの「到着」では、著者の体験がほぼそのまま作品に反映されており、個人の戦争体験に基づく個人史的な小説となっている。

(2) 二人目は、1940年10月にアメリカ合衆国に亡命し、7年後ようやく故郷の南ドイツのボーデン湖に

戻ってきたヤーコップ・ピカートである。アンソロジーで紹介されているのは自伝的な小説で「新聞紙」といい、ドイツの強制収容所を生き抜いたある人物との出会いについて語られている。

小説の主人公は戦時中アメリカに亡命したのだが、今はドイツからの亡命者らを支援しているクエーカー教徒の団体に身を寄せている。1947年の夏、強制収容所を生き延びたわずかな人たちが数名が、主人公と同じように、海を越えてやって来た。その中の一人がアルバーという男だが、右手の指が凍傷で曲がり、前歯が3本抜け、実年齢以上にひどく老けているように見えた。彼は戦時中ダッハウの強制収容所に捉えられていて、連合軍に解放された時には肋骨が3本折れ、前歯も無くなっていたという。

ある日のこと、主人公らは、戦争時になされた犯罪に対するドイツ人全体の罪と責任という問題について議論していた。その中の一人が、ユダヤ人に対する攻撃を目にしながら何もしてこなかったのだから、起こった事柄に対してドイツ国民の一人ひとりに責任を取らせるべきだと述べたとき、意外にも強制収容所体験者のアルバーがそれに強く反対したのである。やがてアルバーが静かに語り出す。

晩秋のある日、アルバーら20数名が、ほとんど交代のない4人の退役軍人の監視の下、森の近くの沼沢地で働いていた。その時アルバーは、偶然自分の側の草むらの中に露に濡れた1枚の新聞紙を見つけた。強制収容所の収容者が外界の情報に接したことが露見すれば一体どういう結果になるのかは分かっていたのだが、彼は「自由の世界の情報」、「生きた人間の声」<sup>7)</sup>に触れたいという思いを抑えきれず、そと新聞紙を拾い上げズボンの後ろポケットにねじ込んでしまう。

ところが行進しながらの帰路の途中、アルバーたちは不運にもオートバイに乗った親衛隊らに鉢合わせすることになる。

親衛隊の6人の若者だった。自分たちの任務の重

要性にまるで酔っているかのように、彼らはオートバイから飛び降りてきた。そして一人が叫んだ。「止まれ！ 身体検査だ！ 気を付け！」

アルバーは、震え上がった。2列に並んだ収容者たちが、順番に身体検査を受けることになる。私は2列目の最後に立っていた。

すると突然私は、新聞を隠したところを誰かに触られているのを感じた。振り向くことは出来なかった。しかし私はその直前に、退役軍人の一人がぴったり私のすぐ後ろに立っていることことに気が付いていた。<sup>8)</sup>

アルバーは、奇跡的にこの危機を脱することが出来た。後ろポケットの新聞は、言葉を交わしたこともない一人の退役軍人の手によって抜き取られていたのだ。今度はその退役軍人に自分の生死の決定権が握られてしまったのかと不安に思うアルバーだったが、数日後のある日のこと、退役軍人は無言のまま彼に折り畳んだ新聞紙をそと手渡し、立ち去って行くのだった。

私は彼の名前を知りませんし、彼がどこから来たのかも知りません。次の日、彼とその仲間たちはいなくなっていたのです。私はもう恐れる必要はありませんでした。そして分かったのは、彼が人間であったということ、私たちと同じような一人の善良な人間であったということ。どうして彼に罪があるのでしょうか。<sup>9)</sup>

実は作者のピカートは、1947年に小説の主人公と同様の体験をしている。つまり、強制収容所の体験者から、実際このような話を聞いているのである。そして、戦争や強制収容所という極限の残虐性の中にも見られる個人の善意を、こうしてエピソードの形で書き記すことにした。

このように二人の作家を例にとりて、『亡命、反抗、

内的亡命 1933～1945 年までのバーデン地方の作家たち』の紹介を試みたのだが、他の作品にも共通して言えることだが、戦争責任の追及を声高に求めるようなものは意外と少ない。むしろ戦中戦後の個人的な体験をドキュメンタリー風書き記しているだけの作品が多い。国が減び、制度が減び、一つの価値観が崩れ去ったときには、日常の些事のレベルにすべてを還元させないことには真実や現実はまだ語れないのかもしれない。それが、こういう極限状況でモノを語るときが一番誠実な態度なのでもあろう。ただ他方、それぞれが自分の直接的な体験を語り、自らの足元を見直すことの必要性・重要性を認めながらも、それが個人の体験の域を出ないことにある種のもどかしさを感じることもまた事実なのである。このもどかしさを解消させてくれるようなものとして、大胆なフィクション世界を構築し、伝統的なヨーロッパ精神文化そのものを問い直すような試みを行った作家として、次にアルフレート・デーブリーンを紹介することにしたい。

### 3. アルフレート・デーブリーンの戦中・戦後

#### (1) 作品の背景

1929 年に出版された『ベルリン・アレクサンダー広場』で大成功を収めたデーブリーンであったが、ナチスが政権を取った 1933 年にはもうすでに家族と共にドイツからパリに脱出していた。そこでファシズムに対する自らの闘争の意志を確認した上で、1936 年にはフランス国籍も取得している。そして、1939 年に第二次世界大戦が始まると、その翌年にはスペイン、ポルトガル経由でアメリカに亡命することになる。アメリカでは主にカリフォルニア州のハリウッドに滞在し、不自由な暮らしに耐える日々が続いたが、戦争終了後の 1945 年 11 月には 12 年ぶりにドイツに戻っている。帰国後はフランス軍占領下の南ドイツ、バーデン・バーデンに移り住み、フランス占領軍の文化部長として出

版物検閲の仕事に従事する。それと同時に、文芸雑誌『金の門』を創刊し、戦後ドイツの民主化に文化面から寄与することになる。

帰国前後のこの時期に書かれたものとしては、自らの亡命体験を語った『運命の旅——報告と告白』、歴史小説『1918 年 11 月、あるドイツ革命』、そして、イギリスに架空の家庭を設定した家族小説『ハムレット、あるいは、長き夜は終わりにて』などがある。その中でここでは、『ハムレット、あるいは、長き夜は終わりにて』（以下、『ハムレット』）を取り上げて、デーブリーンの戦中と戦後、特に彼独自の戦争原因の追及の方法について考えてみることにする。

小説『ハムレット』は 1945 年 8 月から翌年の 10 月にかけて書かれたものだが、執筆のきっかけになったのは次男ヴォルフガングの痛ましい死であった。ヴォルフガングは、1940 年 6 月 21 日フランスのヴォージュにおいてドイツ国防軍に包囲され、捕虜になることを恐れて自ら命を絶ったのだ。この息子の死がきっかけとなり、デーブリーンはこれまでの家族の関係を問い直すために『ハムレット』の執筆を始めたに違いはない。だが、息子を死に追いやった原因を探すのに、一家庭の人間関係のみを問題にするのではなく、広くヨーロッパの精神文化の歴史までもを視野に入れ検討しようとするのである。そのため小説の舞台は、戦争の直接的加害国ドイツではなく、一見戦争責任には無縁と思われるイギリスに置かれ、ここで取り扱われる問題の普遍性を案に示しているのである。『ハムレット』の中では、具体的な戦争行為が描かれるわけでもないし、誰かの罪が直接的に暴かれ、声高に責められるわけでもない。しかし、戦争を生み出したであろうヨーロッパの精神風土のようなものが、一家族の人間関係の中からゆっくりとあぶり出されてくるのである。

#### (2) 主人公エドワードと父ゴードンの立ち位置

彼は送還された。アジア大陸に一步を記す運命が、



彼には巡ってこなかった。<sup>10)</sup>

『ハムレット』冒頭のこの一文は、この小説中で主人公エドワードが置かれた特殊な立場を示している。エドワードは、イギリス人として第二次世界大戦が始まると同時に志願し、ノルマンディ、フランス、ベルギーと戦場を駆け巡った。そして、ヨーロッパでの戦闘が終結し、今度は日本攻撃への準備が開始されることになる、エドワードは再度自ら極東への派遣を願い出るのだった。彼は、もうヨーロッパには飽き飽きとしていたのである。<sup>11)</sup> ところが彼の夢は、「パナマ運河を通過してから 5 日目の朝まだほの暗いころ、2 機の日本の特攻機が船に飛び込んできた」<sup>12)</sup> ことによって、挫折する。ヨーロッパ脱出の試みが失敗し、エドワードは記憶と左足を失った状態で、ヨーロッパに送還されることになる。

ロンドン郊外の家で記憶を取り戻したエドワードは、この家に暮らす家族とは何の関係もなさそうな戦争責任という重いテーマを家庭の話題に持ち出し、家族のみんなを困らせる。<sup>13)</sup> 特に父親のゴードン・アリソンにとっては、エドワードの「戦争や彼の不幸にはある種の人間たちに責任がある」<sup>14)</sup> というテーゼは極めて悩ましいものとなる。というのも、ゴードンは戦争を完全に傍観者としてやり過ごそうとしていたからだ。

戦争というものは、世界史の光にあててみると、効き目のある薬草も見当たらない流行性感冒や、チフスや、猩紅熱と同じく、ときどき人間の間に必然的に起こるものだ、と考えていた。だから、戦争を耐え忍び、出来るだけそっと戦争をやり過ごそうとするのがつねだ、と言うのだった。<sup>15)</sup>

戦争により心と体に深手を負ったエドワードには、こうしたゴードンの無責任な態度は決して許されるものではなく、彼は追及の手を緩めない。

エドワード：「だから、私たちは行動しないのですか。何もしないままでいいと言うのですか？」

ロード・クレンショウは目をしかめた。彼は沈んだ調子で考えを述べた：「私たちは自分のことは何もわかっていない。時々まるで人形芝居のような気がする。自分たちが人形で、人形使いが後ろで操っているんだ。はるか遠く雲の中で」

エドワード：「人形ですか。そこまで言ってしまうんですか？」

「長く生きれば生きるほど、はっきりと分かってくるんだ。だんだんと自分自身から遠ざかっていく。諦める。背後にあるものに逆らうことなど考えなくなる」

暖炉のそばの大きな光輝く姿は、すっかり変わってしまった。うち沈んでぐったりとしたゴードン・アリソンは、両方の足を伸ばし、前方をぼんやりと見つめていた。

エドワード：「すると結局、人間なんかいないと」

「そう、それが最高の叡智だよ。もしお前がそれについて嘆くのであれば、私も同じだよ」

エドワード：「でも、もしも人間がいたとすれば」

「人間なんていないよ、エドワード。そう考えた方がいい」<sup>16)</sup>

ヨーロッパでの二つの世界大戦を経験したゴードンには、自分の行動に責任を持つような主体的で理性的な人間像など、ただの絵空事の観念でしかない。何か見えないものの手によって動かされ、流されてゆくのが我々人間の姿ではないか、とゴードンは考える。これはまるで救いのない絶望的な見解だが、ゴードンの正直な気持でもある。だが、若さゆえに経験が乏しく、心と体に受けた傷の責任をどこか自己の外に求めようとするエドワードには、父の言葉は言い逃れにしか聞こえない。エドワードが父に賛同しないまでも、父をある程度理解するようになるには、今後「他者」との出会いが彼には必要であった。

## (3) 語りの多声性の中から見えてくるもの

エドワードの執拗な追及に困り果てたゴードンは、戦争責任について各自が自由に物語の形で語る「語りのタベ」を提案する。その参加者は、アリソン家の家族とその友人・知人たちである。こうした語りの世界においては、語り手自身もその物語の中に登場するし、聞き手の側もまた様々なキャラクターとして物語の中に登場するのである。すると、登場するすべての人物像が互いに交錯しあい、一定の姿・形を保持できなくなる。つまり、固定した自我のあり様が崩され、次第に拡散してゆくのである。

例えば、横暴な父親に苦しめられていたと思われた母親アリスが、実はエドワードを利用して逆にゴードンに復讐を企てていたのだ、ということが物語を通して明らかになったとき、エドワード、ゴードン、アリスのこれまでの相関関係が崩れ、それぞれの人格像が根こそぎ揺らいでくる。「語りのタベ」の参加者は、他にも妹のキャスリーン、伯父のジェームズ・マッケンジー、キング医師などがいるのだが、物語の語り手が多くなればなるほど、語る側と聞く側の両方の存在が多様な物語の相互干渉によりますます不確かなものになる。そこに居合わせたすべての人が、物語の持つ多声性の重なりの中で揺らぎだすのである。まさにゴードンが先に述べたような、主体的で理性的な自立した「人間なんかいない」という状況となる。

掴みきれない自己と他者の存在とその相互関係に直

面したエドワードは、これまでの自己の殻が打ち砕かれ、新たな眼差しの下で父親を見直すようになる。ここで初めて、異質な他者を排除せず、他者との共生を目指す新しい認識の地平に立つことが出来るのである。

すべての価値観が一旦は崩壊した戦後、過去の伝統的な人間観や、それに基づいた合理主義や民主主義をそのまま再び唱えることは、いずれの戦後作家においても等しく困難なことであった。そのような時、オットー・シュラークやヤーコップ・ピカートに代表されるバーデン地方の作家たちの多くは、戦争体験を日常のレベルで検証し、自らの存在を足元から問い直そうとしたのである。ただその試みは、個人レベルの反省・省察を超え出ることにはほとんどなかった。だがデーブリーンは、ヨーロッパの任意の一地方に架空の家族を設定し、それを、ヨーロッパの伝統的精神文化と戦争責任との因果関係を考察するための普遍的な舞台にしたのである。戦後の一時期フランス占領下のバーデン・バーデンに暮らしていたデーブリーンであったが、それは心と体の両方に深手を受けたエドワードが故郷の家族のもとに帰って来たときと状況は同じである。つまり、悲惨な戦争体験があったにもかかわらず、何もありません様が変わらぬままのドイツと国民をそこに見出したのかもしれない。だからこそデーブリーンは、伝統的な理念に基づく個としての存在に戦争責任を求めるよりも、そのような個を生み出したヨーロッパの伝統的精神文化の中にこそ真の原因を求めたのである。

## 註

- 1) Hansgeorg Schmidt-Bergmann: Exil, Widerstand, Innere Emigration. Badische Autoren Zwischen 1933 und 1945, Edition Klaus Isele 1993.
- 2) Ebd., S.7.
- 3) Otto Schlag: Ankunft. In: Exil, Widerstand, Innere Emigration. S.136.
- 4) Ebd., S.140.
- 5) Ebd., S.139.

- 6) Ebd., S.145.
- 7) Jacob Picard: Das Zeitungsblatt. In: Exil, Widerstand, Innere Emigration. S.122.
- 8) Ebd., S.123.
- 9) Ebd., S.125.
- 10) Alfred Döblin: Hamlet oder Die lange Nacht nimmt ein Ende, S. Fischer 2008, S.11.
- 11) Ebd., S.25.
- 12) Ebd., S.11.
- 13) Ebd., S.35f.
- 14) Ebd., S.36.
- 15) Ebd., S.33.
- 16) Ebd., S.164.

#### 参考文献

アルフレート・デーブリーンの『ハムレット 上・下 あるいは ながき夜は終わって』早崎守俊訳、筑摩書房、1970年。

長谷川純『語りの多声性 デーブリーンの小説『ハムレット』をめぐって』鳥影社、2013年。

Helmuth Kiesel : Literarische Trauerarbeit. Das Exil- und Spätwerk Alfred Döblins. Niemeyer, Tübingen 1986.

〔本研究は、共同科研の平成26年度の成果（共同科研：研究題目：シュトゥットガルトにおける芸術アカデミー改革とヘルツェル学派の改革的伝統（研究種目：基盤研究（C）、課題番号：25381028, 研究分担者・研究協力者：鈴木幹雄、清水光二、長谷川哲哉、研究期間：平成25-27年度））である。〕